

第 18 回 沖縄科学技術大学院大学学園の今後の諸課題に関する検討会 議事要旨

1. 日時：令和元年 6 月 19 日（水）13:00～15:30
2. 場所：中央合同庁舎 8 号館 8 階特別大会議室
3. 出席者
 - (1) 構成員
相澤座長、西澤座長代理、大島委員、岡崎委員、瀧澤委員、宮浦委員
 - (2) 内閣府
北村沖縄振興局長、馬場審議官、田村総務課長、重永次長、中島企画官
 - (3) OIST
グルース学長、バックマン首席副学長、吉尾 COO、芝田副学長、岩佐准副学長、
ピーチシニアアドバイザー

4. 議事要旨

議事 1 OIST の将来構想について

各委員から主に以下のような指摘・意見があった。

OIST が今後どの部分を成果として出せば、ハイトラスト・ファンディングが継続するのか、戦略の中で示していただいたほうがよかったように思う。戦略のほうは網羅的に書いてあって、実は余り戦略論にはなっていないのではないかという印象を受けた。

世界的なプレゼンスを上げるためには人材の数も大事だが、人をふやすことによってクリティカルマスがどう成長していくかがわかりにくかった。また、日本の大学が持っている問題と根本的に一緒だが、ハイトラスト・ファンディングと言われているのが日本の大学にとっては運営費交付金であり、それが上がるということは今の日本の人口を考えてもあり得ない。その状況を踏まえて考えていくべき。

人材として人をふやしていくという話と、予算の関係をどういうふうに計画しているか、コンセプトとしてはわかるが、具体的にどういう形になっているか示して欲しい。

OIST は大学というより、リサーチユニバーシティの特別のトライアルだと認識しており、他の国立大学と比較できない。今後どのリサーチのフィールドを強化していくか戦略が最も重要。例えば、弱かったところを強くするのか、得意分野を強化するのは重要だが、後者の方がプレゼンスにとってはいい可能性もある。

日本の科学技術及び大学の危機について、大変有益な見解と理解。ハイトラスト・ファンディングの重要性を具体的に示されたことも、重要と思う。OIST はハイトラスト・ファンディングに支援されている極めて珍しい大学である。今後の戦略はそのメリットを活かしつつ、一方でこれ以上のハイトラストを与えるのは政府としてなかなか難しいと思う。このことをきちっと指摘し、日本全体の問題と同時に、OIST と対比して整理していただく必要がある。また、OIST のプランの根幹がまだ明確ではない。この戦略計画の説得性・妥当性が具体的に示されていないと思うのでブラッシュアップして欲しい。

議事 2 平成 30 年度事業報告について

各委員から主に以下のような指摘・意見があった。

最近の国立大学を含めて非常にホットイシューとなっているのは、輸出安全保障だと思う。Unverified list 等に対して各大学も神経質になっている状況であるが、OIST ではどのように対応しているのか。

POC プログラムの評価に関連して、発明の商業化支援について実施されているようだが、具体的にどのような支援をしているのか。

OIST はトップレベルの学生の教育をベースにしないといけないと思うので、一番重要である PhD プログラム及びプロフェッショナル・ディベロップメントの評価が A + にならなければならないのではないか。

議事 3 OIST の 10 年後見直し - 評価の視点：各論「組織運営」

各委員から主に以下のような指摘・意見があった。

体制図の中に、エグゼクティブ・コミッティーとアップパー・マネジメント・ミーティングというのが入っていない。もう一つ、教授会の存在がどこにもあらわれていなくて、いきなり教授会議長という言葉が出てきている。以上、3つの組織がどういう位置づけになるのか、体制図の中で示して欲しい。理事会の開催頻度は年3回ぐらいであり、要するに、意思決定組織は非常に頻度の少ないもので行われている。これでは回らないはず。そのために、運営上いろいろな工夫が行われているわけで、その一つが今のエグゼクティブ・コミッティーとかその他のものだと思うので、ここで議論するのは、(法人としての)組織運営、(大学院としての運営の)両方を議論するところなので、どのように運営上カバーしているかきちっと示していただくことがこれからの議論に重要になるかと思う。

本当に望ましいガバナンスの構造を、さらに研究者も含めて全体としてどういうあり方がいいのかというモデルを一回お示ししていただいて、今後の日本のこれからの大学運営を考える上でのモデルとして優位性を持つということまで示して欲しい。

職員の人材育成について、人材の確保や定着が難しいというお話があった。職員の方の質及び量の確保が極めて重要だと思う。どのようにして確保するか工夫が必要。

議事 4 その他

各委員から主に以下のような指摘・意見があった。

各回で議論をまとめるプロセスがないので、どのように進めていくかは検討が必要。

地域の貢献・イノベーションの貢献について、どのように説得力を持たせるかが、その後の 10 年に繋がっていく。例えばベンチャーの育成に関して、日本の育成環境は諸外国に比べて非常に弱い。アメリカのエコシステムは非常に強力であり、そこと対応しようとした時に OIST の研究成果をアメリカに持ってかれてしまうのかと懸念している。OIST としてどのようにチャレンジし、日本の環境を含めたイノベーションにどう取り組まれるのか。

以上